

## 教育ツール化する絵本



田中 尚人（日本）  
グランママ社編集長  
NPO 法人ファザーリング・ジャパン理事  
「パパ's 絵本プロジェクト」メンバー

少子化、核家族化が進む日本では、母親に育児負担が偏重し、育児への不安や悩みが、出口の見えない密室で蓄積している。それが一因となってか育児鬱、幼児虐待、育児放棄、早期離婚、引きこもり、モンスターペアレンツ化など、様々な問題を生み出している。

子どもと絵本を楽しむという習慣も、家庭内ではいつしか早期教育、情緒や感性の育成を目的にしたり、子どもを寝かしつけるための催眠剤として使われるケースも目立つようになってきている。また、読みきかせの現場でも、読み手と聞き手が共に楽しむことよりも、授業のように静かにお行儀よく聞くことに比重が置かれているケースが相変わらず多い。

家庭の絵本棚も、母親の視点で選ばれた絵本だけが並ぶことが普通の有り様で、そこに父親の視点はほとんど介在していない。それは、父親が同居していながらも母子家庭状態である多くの日本の家庭の姿に重なるものがある。

父親視点、つまり楽しさや怖さ、驚きを原点とする絵本や民話の出発点に注目が集まることで、笑顔の子ども、お父さんお母さんが増えることを願っている。そして絵本が教育ツールとしてではなく、親子を結ぶ楽しさの共有体験として、もっと気軽に利用されるものになってほしいと思う。



大人だって、こんなに底抜けに笑いあいたい。まさしく、子どもは、読み手の表情の鏡。



「この絵本の真似をしないで、約束してくれる？」  
「ぎやはははは。いいから、もう一回、読んで！」

もうひとつ。民話や幼児向け絵本が、最後は決まって仲直りして仲良しになるという結末に改変されているケースが目立つように思える。

本来、たった一回の過ちが取り返しのつかない結果を招いたり、唐突な別離や死が背中合わせになったりするの、民話や寓話の一つの側面と言える。木や藁で家を建てたという失敗だけでオオカミに喰われてしまったり、禁を破ってたった一

回視き見をしたがゆえに破産させられたり、玉手箱を開けてしまえば老人になり、子どもらしいウソをついただけでオオカミに食べられてしまうのが絵本の世界では日常茶飯事なのである。

子どもたちにしてみれば、理解を超えた顛末、極端な表現、あるいは不条理な過酷さが、良くも悪くも簡単には飲み込めない異物として心に残ることになるはずだ。簡単に飲み込めないからこそ、繰り返し聞きたくなったり、解決できないしこりとなって、強烈な印象を残すことになるのではないだろうか。

ところが、どんな過ちでも最後に謝れば許され、笑顔で仲良しになってしまうといった結び方では、誰でも納得しやすい分、何の印象も残さずに安易に素通りするしかない。これでは、民話や寓話が次世代に受け継がれなくなるのではないだろうか。この傾向は、創作絵本にも当てはまる。

しかし、世の不条理、醜さ、惨さから子どもたちを遠ざけ、きれいごとだけを見せ続けることが、果たして彼らの心の世界を広くするだろうか。「よい絵本」「よいお話」だけが、本当に子どもの感性を磨くのだろうか。

これは、絵本や民話の未来だけならともかくとして、子どもの未来が関わっている重大なポイントだと思うのだ。



お行儀なんて、後回し。絵本に入り込めば、自然に体が動き出す。



楽しいことは、特等席で味わいたい。押しくらまんじゅう大歓迎。



絵本をオリジナルの歌にのせて。一番楽しんでいるのは、間違いなく僕ら自身。